

異世界を制御魔法で切り開け!

Carve The Another World
by CONTROLLING MAGIC

佐竹アキノリ

Satake Akinori

3



主な登場人物

Main Characters

ヴィクラム

マハヴィル王国にて
起きた反乱を治め、
頭角を現した青年。

ラクシュミ

ヴィクラムの妹。
兄を助け、パートたちと
共に盟主討伐に臨む。

カリナ・ホラーク

エヴシェンの娘。
引っ込み思案で
夢見がち。

**エヴシェン・
ホラーク**

チエベク共和国議会の
議長を務める
エルフの王族。

**トマーシュ・
ホラーク**

エヴシェンの息子。
王族としての
使命感に燃える。

パート

アーベライン領の冒険者。
高い実力を持つも、
軽薄でお調子者。

ブルー

かつてエヴァンと協力して
オーガ討伐を果たした
熟練の冒険者。

セラフィナ

エヴァンに付き従う
獣人の女の子。
時空を探る魔法に
高い適性を持つ。

エヴァン・ダグラス

異世界に転生した主人公。
貴族である生家から出奔し、
冒険者となる。
制御工学の知識を
魔法に活かすべく奮闘中。

チエペク共和国は、その東西において文化も種族構成も大きく異なる特徴を持っている。西にはドワーフたちが住んでおり、炉には盛んに薪がくべられ、煙突からはもうもうと煙が上がり、作業着を着こなした男たちがつるはし片手に朝から炭鉱に赴く。一方、東にはエルフたちが住んでおり、日夜畑を耕し木々を愛で、小鳥のさえずりを聞いて詩を口ずさむ。

気性も生活様式も全く違うこの二つの種族が一つの国に纏まっているのは、皮肉にも他国に戦争の気配があつたことが理由だつた。

ドワーフとエルフは十年ほど前まで互いを敵と見なして、戦争を繰り返していた。だが、北のハンフリー王国、東のマハヴィル王国が力をつけるにつれ、対抗する策を練らなければならなくなつた。

しかしこチエペク共和国は南方、西方を海に囲まれており、同盟を結ぶ相手など存在してはいなかつたのだ。唯一、長年剣を向け合つてきた相手を除けば。

そこで名目上は、互いの発展のため、豊かな暮らしのため手を取り合つたのだが――

リボル・ザオラルは今日何度も嘆息を、周囲に聞かれないよう小さく漏らした。

彼は共和国議会の議長を務めているドワーフの男で、齡は五十を過ぎ立派な髭を蓄えている。本

来の姿は威風堂々としていたものの、今は小さくなりがちだ。本人はそのことを自覚するなり、すぐさま居住まいを正すのだが、そうしたところで彼の憂慮が取り除かれるわけでもない。それでも彼には、弱腰であると見られるわけにはいかない理由があつた。

この議会には、議長が二人いる。それは通常どの国家においてもありえぬ状況だつたが、そうせざるを得ない理由がある。ドワーフとエルフ、どちらが国家の長となるかで揉めに揉めた挙句、いよいよ東方のマハヴィル王国が軍事行動に乗り出すとの情報があり、ならば一時的にでもと慌てて

両種族から議長を立てて発足させたのだつた。結局は杞憂に過ぎなかつたのだが、一度決まつてしまつたものは容易く変えることができず、そのままの制度が以降十年続いてきた。

リボルは向かい側に座つてゐる男を見遣る。逞しく武人とも見られがちな彼とは対照的に、立ち居振る舞いも姿そのものも優雅で、宮廷で詩をそらんじているのが似合うような貴人だ。

エルフの議長、エヴァン・ホラーケである。古代王朝の末裔だと噂されているが、武骨で煤に塗まれて生きるドワーフたちからすれば、そんなものは『気取つた』様でしかない。端的に言つてしまえば、気に食わなかつた。

エヴァンはリボルの視線に気がつくと、柔らかな笑みを返した。リボルとて、この男が嫌いといふわけではないのだが、周囲に並んでいるドワーフたちの心境を慮ると、仲良く手を取つてもいられないのが実情だつた。

「では、砦の兵からの連絡につきまして、述べさせていただきます。ハンフリー王国からは『盟

主』討伐の名目で斥候が送られてきていますが、その実、こちらの動きを警戒しているものと思われます。また、マハヴィル王国も国境の警備を強めており、緊迫した状態が続いているとのことです」

男が述べると、この場の誰もが浮かない表情になつた。が、すぐさまエルフの男が発言を求める。「では、こちらも警備を強めねばなりますまい。兵糧食を用いる許可を」

マハヴィル王国があるのは、エルフたちが住む地域の東だ。そちらの武力を強めるということは、エルフたちに有利に立たれることと同義で、当然ドワーフたちはそれを快くは思わなかつたが、弁が立つ者もおらず、ついには許可されることになつた。

このように議会は、エルフとドワーフが互いに相手をやり込めるための場と化していた。

会議が終わると、それぞれの種族は顔を合わせることなくその場を後にする。

エヴァンは彼を囲む議員たちと挨拶を交わしつつ、その向こうに少年と少女、二人の姿を見つけて、それまでとは違う柔軟な笑みを浮かべた。取り巻きたちもそんな彼の視線に気がつくと、優雅な一礼を見せる。

「父上、いかがでしたか？ 日々、民の不安は高まつております。どうか、御一考を」

「おお、トマーシュ。なに、案するでない。この国を守らんと思うのは、誰もが同じであろう」

エヴァンの長男トマーシュは、今年二十歳になる。まだ幼さが抜けきらないものの、民からはいよいよ王族の風格が出てきた、と噂されていた。

そして彼の後ろに隠れるようにしつつ、父の様子を窺うのは長女カリナ。権謀術数が渦巻く宮

殿においても穢れなき姫君であると評判の大人しく淑やかな少女は、民からはまるで我が子の如く慈しまれている。

そんな若き次代の希望を前にしてエルフたちが俄かに活気づく中、議会には相応しくない格好——鉄の鎧を纏つた男たちが入ってきた。佩劍こそしていらないものの、その逞しい腕で一ひねりすれば、ひ弱な文官など簡単に絶息しそうな威圧感がある。

彼らドワーフたちの先頭にいた男、ヘルベルト・ボチエクはリボルの姿を認めると、頭を垂れた。

「ヘルベルト・ボチエク、魔物どもの制圧を終え、帰還いたしました」

「おお。して、どうであつたか」

「は。民一人とて傷つけさせてはおりませぬ。昨今の食料不足により、やつらめはたまま人里へと降りてきたようで——」

ヘルベルトの報告を聞きながらリボルは、似合わぬ、と思わずにはいられなかつた。一度戦いとなれば、鬼神の如き働きを見せるにもかかわらず、ヘルベルトが報告で最初に口にするのは、決まつて民のことであつた。

このヘルベルトという男、帰属意識が非常に高い。しかしそれはチエペク共和国に対してではなく、ドワーフの集団に対してもある。

その彼はちらりとエルフたちを見て、内心で悪態を吐く。

(これでは戦中と何ら変わらないではないか。戦場が議会へと移行したに過ぎん)
エルフたちが立案した政策で苦しめられている同胞がいると思うと、ヘルベルトはいてもたつて

もいられなくなる。

そして歴史以外にも、エルフとドワーフの間には大きな溝がある。宗教の違いだ。

ドワーフたちは異界魔神教から分かれた宗教——亜人と魔物は別の存在としつつも、カール・リンクドを亜人たちの先導者であるとしている——を崇拜している。

一方でエルフたちは自然精霊教から派生した宗教を信仰していた。自然そのものが信仰対象であり、とりわけ神木に宿る大精靈と呼ばれる存在を重要視する。神木はエルフたちの住まう領域に生えており、日夜教徒が礼拝に訪れているという。

急な融和政策のため、両者は対立することがたびたびあつた。有名なのは、かつてエルフとドワーフの国を分けていた国境付近にあつたドワーフの村の出来事だ。

エルフの難癖から始まつた小さな諍いは次第に膨れ上がり、やがてドワーフは武器や農具などの生産品のうち、粗悪品ばかりをエルフに渡すようになつた。腕に誇りのある彼らにとつては苦渋の決断だつたに違いない。

そしてエルフもまた、やられているばかりではなく、彼らへの食料供給を断つた。ドワーフは貧困に喘ぐようになり、男たちは我慢ならぬと一齊蜂起した。

乱はすぐに收められたが、大きな禍根を残すことになつた。

ドワーフの乱を収めたのはエルフであり、彼らは復興を名目に兵を引かず、そのままドワーフの領地を奪つてしまつたのだ。

彼らの対立はこれ以降、また深まつていつた。

ヘルベルトは貴族然としたかつての敵を見ながら、その瞳に明らかな敵意を宿させていた。

2

ワツカ共和国の南に、チエペク共和国との国境がある。エヴァンとセラフィナはそこで間諜の可能性があるとして、足止めをされていた。

そうなつたのも、全ては検問の兵が目敏く彼の佩^{めざと}している剣の家紋に気がついたからだ。提示した冒險者証にもエヴァン・ダグラスの名が載っているということもあって、ただの観光ではないと彼は疑われてしまった。

しかし、密命を帯びているのであればわざわざ貴族の血縁を使わないだろう、と扱いかねているようでもある。なんにせよ貴族の子で冒險者というのは、一触即発^{いつしょくそくはつ}のこの情勢において、面倒な存在であるらしい。

兵たちは、確認には時間要すると言った。急ぐ旅でもない。エヴァンは首肯^{しゅくう}すると、そのまま客室に通された。一応は貴族、ぞんざいな扱いを受けることもなく、見張りの兵に告げれば建物内の移動は自由だそうで、荷物を置くなりエヴァンは門の上部に出てみた。

守衛は面倒そうな顔をしたが、たつた一人なら問題はないだろうと通してくれる。門の上部に出ると強い風に煽^{あお}られて、エヴァンは思わず顔を手で覆^{おお}つた。見渡す限りの山々の向こうには、ワツ

力共和国の街が見える。

視線を北西の方へと向けると、海と陸の境界が続いている、その先にはハンフリー王国の領土がある。ダグラス領もそこにあるはずなのだが、山にすっぽりと隠されて、全く見えない。

「セラ。どうやらダグラス領は、思っていた以上に小さいらしい」

「はい。大陸全体で見ると、そうですね」

セラフィナは忌憚^{きさん}ない意見を言う。大抵の従者であれば「そんなことはありません」だとか「要所なのです」だとか、お世辞^{せいじ}を述べるのだろうが、彼女は違う。そういうところがエヴァンの気に入っているところでもあり、長年過ごした中で作られた関係もある。

西に目を向けると、大海原が広がっているばかり。しかし視界の先には、この大陸とは別の大陸が存在しているという。ダグラス領西の港町から船が出ているらしく、エヴァンもダグラス領を経由する旅人からときおり話を聞いていた。

そして南にはチエペク共和国。いくつもの村々の近くにはあまり山がないようだが、鉱山からは石炭などが取れるらしく、工業の発展に寄与^{きよよ}しているそうだ。

「どうにも鍛治場^{かじじょう}のような物が見えないなあ」

工業大国と聞いていたから、工場が立ち並び、黒煙を吐き出しているような様をエヴァンはイメージしていたが、目の前に広がっているのはいかにも普通の農村なのだ。

「それはそうです。この付近には鉱山がありませんから」

兵士によれば、大規模な街は鉱山の近くだけで、それ以外は他国とどう変わるものではないらしい

い。エヴァンと同じようなイメージを持つている人は多いらしく、彼らの対応も慣れたものだつた。

エヴァンがぼんやりと水平線の向こうを眺めていると、隣にやつてきたセラフィナの横顔が目に入り、エヴァンは思わず息を呑んだ。

少し大人びてきた彼女は、しかし変わらず愛らしい容貌ようぼうをしている。最近は切つていなといいうことで肩より少し下まで伸びていた髪は、風に弄もよおそばれてはためき、きらきらと日を反射してまるで金糸きんしの如く輝かがやいていた。

そんなセラフィナは目を伏せ、みかん色の髪から覗く狐耳きつねみみを風に揺らしながら、自然の音に聞き入つてゐるようにも見える。

そこでふと、エヴァンは周囲の者が彼女の姿を気にしていないことに気がついた。ドワーフたちも亜人とされているから、むしろエヴァンの方がこの国では異端よおどなのかもしれない。

「エヴァン様？ 何かありました？」

「色々な国があるものだ、と思つてさ。俺の常識がどこまで通用するのか、不安になつたよ」

「常識破りのお方が、何をおつしやるのです」

「君こそ、しがない貴族の四男坊に何を言うのだろう」

エヴァンがおどけて言い、セラフィナも小さく笑つた。

そして国境を越えたのは、三日後のことだつた。兵たちは各地に連絡を飛ばしたもの、エヴァンに関する情報は皆無かいむで、ただの観光で来たのだと判明したのである。それもそのはず、エヴァン

はチエペク共和国に知り合いなどはいらないのだから。

それから農村を過ぎ、国境から一番近い街を経由し、この国一番の鉱山の街に辿り着いたのは、さらに二日後だつた。

街は燃えているかのように煙が昇つており、家々の周りにはスコップやつるはしがほつたらかしにされている。

行き交う人々は男女共に大柄で、立派な髪を蓄えているのは共通のお洒落しゃれらしい。

「……エヴァン様も髪を生やしてみてはどうでしょう？」

「似合わないよ。それに、そこまで伸びるかどうか」

セラフィナはそんな冗談じょうだんを言い、エヴァンはつるりとした頬を撫なでる。まだ若いからなのか、單

に体毛が薄いだけなのか、髪は滅多に剃らずに済んでいた。

それからとりあえず宿を取り、鍛冶場と冒險者ギルドを探す。街を歩いているとどうにも埃ほこりっぽく、とにかく咳せきやくしゃみが出そうになる。

一応の目的はあるものの、見るもの全てが目新しく、ついつい寄り道をしてしまう。手先が器用な者が多いのか、ガラス細工などの品は芸術的だ。無骨な彼らの姿とは似ても似つかないから、ひょつとすると観光客に向けたもののかかもしれない。

そうしているうちに、エヴァンの視線が店先に展示されている石人形に留まつた。

「……」

ゴーレム。本物を見るのは初めてだつたから、エヴァンは矯めすがつ眇めすがつそれを眺めた。すると店

主がやつてきて、ちょっとした説明をしてくれる。

魔石を中に入れるとそれが動力源になり、動かすことができるらしい。簡単な命令だけをこなせるようで、命令を出すときには触れて操作する必要があるそうだ。
浪漫に反して便利なものではないようだ、と思いながら値段を尋ねてみると、彼の想像よりもゼロが一つほど多く、とても手が出せそうにない。店主も売ろうとしていたわけではないらしく、異国からの客に豪快な笑いを浮かべた。

それから店を出たものの、エヴァンの頭の中にはまだゴーレムのことがあつた。制御魔法の使い手と名高いカール・リンドは、ゴーレムを使っていたそうだ。何か関連があるかもしれないし、後で図書館にでも行って調べてみようと思いついた。

そうこうしているうちに、一際大きな鍛冶場が見えてきた。どうやら、何人もの鍛冶師が集まつて仕事をしているらしい。

入り口の方では来客に向けた受付があつたので、エヴァンはひとまず話をすることにした。

「いらっしゃいませ、どのようなご用件でしょうか？」

「ええと、この龍の牙を剣の形に仕上げてほしいのですが」

エヴァンがワッカ共和国で予言と共に渡されたそれは、悪鬼を討つ剣になるという。真実味に乏しい話だが、鍛冶師ならば何かわかるかもしれない。

エヴァンが手渡すと、受付の女性は目を丸くした。さもありなん、金属ではないのだから。このような依頼はそろそろ飛び込んでこないだろう。

女性は慌てて奥へと駆け込んでいったかと思うとすぐに戻ってきて、エヴァンは奥に通される。中に進むにつれて温度が上がつて、彼はうつすらと汗を浮かべた。
来客用の一室で待つていると、すぐに筋骨逞しいドwarfの男性が入ってきた。全身は煤に塗れており、いかにも親方といった風である。

「龍の牙、と聞いてきましたが」

「ええ。このままではなまくら同然。天地を切り裂く名剣に仕上げていただけないものかと」
エヴァンは半ば冗談めかして言つたのだが、職人は一つ唸ると、龍の牙を睨んだ。その真剣な眼差しに圧倒され、エヴァンは何も言えずに待つことしかできなかつた。

それから暫くして、男はエヴァンに向き直つた。

「研磨してそれなりの形に仕上げることはできるでしょう。が、生憎とこの硬度の材料を削れるほどの研磨剤はありません」

「それはどこで得られるでしょうか？」
男は億劫そうに視線を彷徨わせる。

「エルフのところにいきやありますよ。宝石を削るのが趣味のやつらですから」
そうそつなく言い捨てるど、あからさまな嫌悪を露わにする。ドwarfとエルフの仲はよくないと聞いていたが、本当だつたのだろう。

ともあれ、現状ではどうしようもないとわかつたので、いざれそちらを当たることにして、エヴァンは腰に佩いていた剣を彼に見せる。日頃から砥石である程度の手入れはしていたが、曲げ直し

や本格的な研磨を行つてきたわけでもない。修繕を頼むことにした。

男は剣の状態については何も言わず「相^{あい}わかり申^{もう}した」とただ一言告げた。剣の使用法に不満があつたのかなかつたのか、何も読み取れはしなかつたが、職人としての顔だつたことは間違いない。

修繕に関しては、そこまで金がかかるわけではない。剣は美術品ではなく、敵を殺すための武器なのだから、使えなくなつたら高い値段で修理するより新しいものを買う方がよほどいい。もつとも、彼の剣は家紋が入つてゐるため、そうなる前に実家の蔵にでも放り込むことだろう。エヴァンは手持ちの剣もなくなつたところで、龍の牙を改めて手に取る。ずつしりと重く、棍棒^{こんぱう}としてはこのままでも十二分な働きをするに違ひない。

そんな彼に、立ち上がりかけた鍛治師が告げた。

「ああそうだ、お客人、龍が死と再生を司^{つかさど}ることは御存じで？」

「ええ。少々は」

「それは牙も同じこと、おそらく魔力に反応して破壊と再生を行ふことでしよう。詳しいことはわかりませんが」

後で試してみようと頭に留めて、エヴァンは席を立つた。

帰り際、併設されている展示品や売り物を眺めていく。見事な剣や槍が立ち並び、鎧が堂々と飾られている。

つい先日、水龍の腹の中で鎧は溶かされてしまつたので、今は何も身に着けていない。何か新調したいところだ。筋力も上がつた今なら、鉄製の鎧でも問題ないだろう。

手持ちの金は六十万ゴールドほど。観光地であるワッカ共和国でも辺境の街ばかりに行つていたため豪遊することもなく、さほど減つてはいない。

半年近く生活できる額であるそれとて、フルプレートアーマーを買うには倍も用意しなければならないのだから、一流の兵の稼ぎには程遠い。よいものを使うに越したことはないのだが……

なんにせよ、手持ちの金がないのでは話にならない。エヴァンは結局、染みついた貧乏根性のせいか、一番安い鎧を買うことにした。

胸部だけを覆う薄い鉄製の鎧は少々心許ないが、革鎧と比べると遥かに重厚に見える。いよいよ冒險者らしくなってきた。

「エヴァン様、ご立派です！」

「何も変わつていないのに、強くなつた気分だよ」

「はい。エヴァン様はいつもお変わりなく」

エヴァンの見た目は出会つた頃からほとんど変わつていない。適当に切られた黒の髪、感情のさほど浮かばぬ茶の瞳。衣服も元々高価なものなど身に着けてはおらず、「いつものエヴァン」が立派であるとは言い難い。

しかしそれでもセラフィナにとつて、エヴァンは立派な存在なのだろう。エヴァンがセラフィナを誰よりも素晴らしい女性であると思うのと同じように。

ドwarfたちが太めなためか、細身なセラフィナに合うものはなく、彼女のものはひとまず保留にして、とりあえずの目的である冒險者ギルドに赴くことにした。

それから街の中心部に向かつて進んでいったが、どうやらこの街は中心に行くほど栄えるということはなく、万遍なく同じような環境が続くようだ。権威や華やいだ生活より、地に足の着いた日常を好む彼らの性格によるものかもしれない。

やがて辿り着いた冒險者ギルドは、ドワーフの設計らしく、薄汚れてはいるが頑丈そうな建物だった。中に入ると、ドワーフが七割、他国からの者が三割といったところである。

他国からの業務を引き継ぐ手続きを済ませ、依頼を見て回る。剣の修理が終わるまではこの街に滞在することになるため、日ぼしいものがあれば受けておこうと思うのだ。

依頼はやはり、鉱山関連のものが多い。鉱夫としての採掘がメインである他、坑内に出現した魔物討伐など、その種類は多岐に亘っている。季節的なものなのか、あるいは任期的なものなのか、今はどこも人手不足に陥っているという。

エヴァンはその中から比較的期間の短いものを選んだ。一週間ほどの短期で、鉱山内に出没する魔物、鉱山モグラを適宜討伐するという依頼だ。日給は一万、ゴールドほどで、さらにその魔物が体内に蓄えている鉱石や宝石の類が加わるようだ。

鉱山資源であれば土地の所有者の物となるが、魔物は所有物であるかどうかが明確に決まっていわけではない。いつときは所有権の主張も盛んであつたが、一方で魔物被害の賠償請求をされるため、結局は無主物先占の原理が適応されることになつたのである。

よつて、この依頼は割と美味しいものだそうだ。

カウンターにて依頼を受けると、明後日の期間開始まですることもなくなる。エヴァンはこの街

で情報を集めることにした。

この街には貴族たちに向けた学校というものはなく、これまでの経緯もあつてあまりいい印象はないが教会を探すことにする。

暫く探すもなかなか見つからず、住民に尋ねてみてようやく見つけた先にあつたのは、エヴァンの想定外のものだった。

「ここでいいんだよね？」

「はい。どうやらそのようです」

エヴァンはセラフィナと共に、建物の入り口を見る。建物そのものは教会とは言い難く、倉庫や物置としてみれば普通なのだが、その前に立っている銅像があまりにも奇妙だった。

大人の等身大の像なのだが、その男には背から龍の翼が生えており、頭には鬼の角が見え、そして腕は悪魔の腕だろうか、筋肉質には見えないものの異様な力強さがある。教会が崇拜するような神には見えず、むしろ邪惡な忌むべき敵のようにさえ見えた。

中に入していく者たちもとりわけ綺麗な格好をしているわけではなく、大多数がつなぎなどの普段着姿だ。そのためここが本当に教会であつているのかどうか不安になつたので、エヴァンはひとまず尋ねてみることにした。

「あの、すみません。ここは教会であつてますか？」

「ええ……観光ですか？ 初めてその像を見る方は、大抵そうおっしゃいますよ」

髭のよく手入れされた中年の貴婦人はころころと上品に笑う。

建物は一階建てで、入つてすぐ正面の礼拝堂と、左右にある職員向けの部屋及び図書室という構造になっている。エヴァンは祈りを捧げることもなく、すぐに図書室へと向かう。

ドワーフたちは本を読む習慣がないのか、そこには人もおらず本もほとんど置かれていません。四列ほどの棚だけがぽつねんとおかれた一室で、置かれている蔵書の種類も偏っている。

そのほとんどの内容が、鍛冶や鉱山などこの街に関するもの、そして制御魔法の使い手であるカール・リンドに関するものであつた。魔法使いはこの街には似つかわしくはないような気がしたが、手にとつて読んでいるうちに、そうではないことがわかつてきた。

偉大なる制御魔法使いカール・リンド。

瞳の一方は灼熱の業火の如き赤、一方は豊穣の大地の如き茶。背では大陸を滅ぼした竜王から奪いし翼がはためき、額には神に逆らいし大鬼を一太刀の元に切り捨て手に入れし角が聳え、そして闇夜の支配者である大魔魔の残しし腕が揺れる。

数万の鉄人形を引き連れ、その行く手を阻む者は神であれ魔魔であれ、蹂躪し尽くす。人を近づけず、しかしその傍らには常に二人の女性の姿あり。両の瞳にはただの一度も憂いも喜びも浮かぶことはなく、唯一それが煌めくときは、神を滅ぼしたときと言われている。

エヴァンは搔い摘んで情報を得ていたが、カール・リンドという人物はかなり過激な性格をしていたようだ。

記述によれば入り口にあつた銅像は彼のものだつたらしい。数多の生き物をくつつけたような様はさながらキメラであるが、それが事実であったのか、あるいは過激さを誇張する後世の創作であつたのかは判然としない。

そんな人物がなぜドワーフたちに受け入れられているかといえば、カールが残したゴーレムの存在が大きいだろう。機械仕掛けの人形であるそれは、工業やからくりを好むドワーフたちにとつて、大いなる興味の対象であったのだ。

ゴーレムについて後世の者が詳しく調べた結果を記したものも多くある。むしろ、カールよりもちらの方がドワーフたちの主な信仰対象と言い換えてもいい。

一般的に、ゴーレムは埋め込んだ魔石をエネルギー源として動いているらしく、「殴る」「物を運ぶ」など、大まかな命令ごとに動かすことができるようである。「手を上げる」といつたレベルまで細かく設定されておらず、プログラムの中身もブラックボックスのままなので調整することもできないそうだ。

カールはゴーレムを引き連れて戦つたというから、あえて内部状態を観測できないようにしたのだろう。容易く外部から測定されるシステムなど何の役にも立たないはず。

エヴァンは周囲に誰もいないことを確認してから、その場に土人形を生成し、これまで明らかにしてきた運動モーションのモデル通りに躍らせたり歩かせたりした。セラフィナは楽しげに、そんなエヴァンとゴーレムを眺めている。

複雑な処理をさせるモデルほど時間がかかり、一方簡単にするほど実際の挙動と理想との誤差が

大きくなる。あちらを立てればこちらが立たぬ関係にあるため、そろそろ都合のいいものは作れない。しかしどりあえず形にする上でさほど重要ではあるまい。

ならば問題は、いかにして自身とゴーレム間で通信を行うかだ。無線のように行うのであれば情報理論など既存の知識でもできるだろうが、それには電流を発生させる必要がある。

一方、この世界で電気がほとんど使われていないせいか、生成魔法に電力を生み出すものは知られていない。

制御魔法による状態の観測は、どうやら外界の情報を魔力に変換して感知しているようなので、その逆変換ができれば電流を発生させることもできるかもしれない。

「エヴァン様、そろそろ……」

セラフィナの視線の先には、こちらにやつてくる人の姿がある。エヴァンが魔法の行使を止める

と、ゴーレムは、次第に崩れていく。

魔法を使つたことによる消耗はさほど感じられない。随分と魔力が増えたものだ。

やがて暇になると、エヴァンは空いた時間を訓練に使うことにした。

街を出て近くの森を行く。依頼を受けてくればよかつたのかもしれないが、そこまで時間を使う予定もなく、すぐ近くで大それた依頼もないだろう。

暫く行つたところで、エヴァンは片手を挙げてセラフィナに敵発見の意を伝える。そこにいたのはオオカミの魔物。通常のオオカミとさほど性質が変わるものではないが、そもそもオオカミは強靭な肉体を持ち、十頭前後の群れで動くという性質がある。

エヴァンは周囲をざつと見回して敵の数を確認、龍の牙を抜いた。彼の背丈よりも長いせいで、木々が入り組んだ状況下では取り扱いにくく、どちらかといえれば槍として扱う方がましなのかもしれない。

侵食領域を開拓するなり手のひらサイズの石を生成し、いくつかセラフィナに渡しておく。それから自身も生み出した石を手にすると、セラフィナのモーションを利用して一つ、微調整を加えながら敵目がけて振り抜いた。

投擲されると同時に侵食領域内でさらに加速した岩石は、狙いを過たず敵の頭部に命中。そのまま昏倒させる。

オオカミどもが物音に気がつくよりも早く、セラフィナはエヴァンに続く。彼女は機械的に制御していないにもかかわらず、正確な動作で全身の体重を乗せて腕を振る。

素早く放たれた石は、オオカミが自らの死を悟るよりも早く命を奪う。そして残りが一斉に向かってくると、もう一発をくれてやり、迫る一匹を仕留める。

やがて彼我の距離が一太刀の間合いに近づくと、エヴァンは龍の牙の中程を腰のあたりで握り、右半身を前に出して槍のように中段に構える。

向かってくる一体をねめつけ、間合いに入るなり素早く重心を前に移動、種先にて打ち落とす。と同時に、側面から襲つてくる敵に対して素早く半身を引き、重心を後方に移しながら、手にした牙をくるりと回し、石突きで打ち上げる。

セラフィナも近づいた一体を槍の中程で打つと、遙か遠方まで突き飛ばした。それにより周囲の



空間に空きができる。

エヴァンは手にした龍の牙をぶん回し、引き気味だった敵の群れをさらに威圧し、一気に退ける。彼を中心に、誰もが近寄らぬ空間が出来上がった。

死んだものを置き去りに、オオカミの群れは息も絶え絶えに逃げていく。エヴァンは追撃しようとも思わず、牙を軽く振つて敵の体液を払う。しかし切れ味などないに等しいので、血はついていなかつた。

エヴァンはふとセラフィナの視線に気がつくと、わざとらしく牙をくるくると回す。

「俺の槍捌きもそこそことだらう？」

「まだまだです。エヴァン様には、剣の方が合っていますよ」

「だろう、そうだろう。やはりそれはセラ、君でなければ」

そういうエヴァンは、知らず知らずのうちに笑みを浮かべている。悔しさなどない。セラフィナの槍の技術が彼よりもはるか上をいくことは、誇りであり喜びでもある。

剣としては武骨すぎるこの代物をどう扱うべきかと悩みながら、龍の牙を再び背に戻し、エヴァンは敵の残した魔石を拾い上げる。

「さて、とりあえず剣がなくとも問題はないようだ。帰ろうか」

「はい。帰りましょう」

そしてエヴァンは来た道を引き返す。多少力をつけようと、何らかの記憶を得ようと、行いも考え方を変えたりはしない。これからも彼女との旅を続けるだけだから。

エヴァンがセラフィナの手を取ると、彼女もはにかみつつ握り返した。

3

エヴァン・ホラークは目頃、穏やかな笑みを欠かさない人物であつたが、今日は些^{しきさ}か事情が異なるようで、慌てふためきおどおどしているように見える。

彼の自宅、玄関前にいるのは青年と少女。自慢の息子と娘である。

「トマーシュ、気をつけていくのだぞ。決して油断してはならんが、常に笑みを浮かべていなければならん」

「はい。承知しております。民のため、ひいてはこの国のために。出来得ることを成し遂げましょう」

「おお、その覚悟やよし。だが、無理はするな。お前に何かあつては困るのだからな」

「大丈夫です、ただの視察ですから。大それたことなど起こらないでしよう」

「そうは言うが……」

今日のエヴァンの姿は議会での優雅な立ち居振る舞いとは違つて、息子の出立を前にしておろおろする父でしかなかつた。

それから物静かな少女、カリナの頭を撫でてやる。彼女は外で目立った自己主張をすることがな

かつたが、家族だけのときには愛情を求めて甘えることがたびたびある。

エヴァンからしてみれば、まだ幼子のようなものだつた。とはいゝ彼女も十六歳である。そろそろ貴族の娘としては、独り立ちして社交界に出ていてもおかしくはなく、優雅なドレスを身に纏い、言い寄つてくる男性たちを軽くあしらついてもいい頃だ。

エヴァンの過剰な愛情の庇護^{ひご}下で育つたせいか、カリナは胸を張つて人と相対することができずにいた。そのため、いつもトマーシュの後ろに隠れている。

そんな彼女も今は満面の笑みを浮かべている。父の期待に応えられるのが嬉しいらしい。「カリナ。何かあつたときはトマーシュを頼るといい。嫌になつたら、いつでも帰つてきてもいいのだからな」

「ふふ、お父様。それではお兄様が困つてしましますよ」

「そのときは私が代わりに謝罪しよう。この身など、お前たちのためなら軽いものよ」

事実、エヴァンはこの国でも一、二を争うほど重要な位置を占めていたが、その全てと我が子を天秤^{てんびん}にかけば、あつさりと二人の方へと傾いてしまうだろう。

国に仕える者としては不十分な覚悟かもしれない。しかし、エルフたちほぼ全員が、国の存続にはその象徴たる王族が必要と考えていた。すなわち、エヴァンとその子たちである。そのため民の彼に対する認識は、国を軽視する者ではなく、次代の希望のためならば我が身とて厭わ^いない慈愛に満ちた英雄なのだった。

やがて親子の別れの挨拶もそこそこに、出発の時間がやつてくる。

「では父上、行つてまいります」

「ああ。気をつけていくがいい」

近衛兵たちを左右に控え、トマーシュは優雅に頭を下げる。そして踵を返すと、振り返ることなく堂々と歩き出した。カリナは一步下がつて彼の後を追い続ける。それは相手を立てる淑女のようにも見えた。

エヴシェンが頻りに心配していたのは、彼らが向かう先がドワーフたちの住まう地域だということが理由だった。エルフたちの領内ならば、多少の不都合があろうが、民があれやこれやと世話を焼いて何とかしてくれるだろう。しかしドワーフたちには、エルフの王族に対する特別な思い入れなどない。

馬車に乗った二人が見えなくなるまで、エヴシェンはその姿を追い続けた。

エヴァンはその日、ギルドの依頼のために、街はずれの鉱山にやつてきていた。周囲には十名ほどのドワーフが集まつており、他国から来た年若い二人は少々目立つ存在だ。

彼らは同じ依頼を受けた者たちで、多数が古びて廃棄されたと思しき軽鎧に身を包んでいる。予算の少ない冒険者としては一般的な装備だろう。

ドワーフたちは立ち居振る舞いこそ他国の冒険者と変わるものではないが、瞳にはぎらぎらした意欲のようなものが見え隠れしている。ドワーフの気性の荒さが理由かもしれない。

それから依頼の説明があつて、ようやく坑内に足を踏み入れることになった。坑口は木枠で囲ま

れており、崩落を防いでいる。それが丁寧に積み上げられたものであつたため、中も安全だろうとエヴァンは安堵するが、進むにつれて支保工は朽ちてしまいそうなほどに古びてくる。ところどころに備えつけられているランタンの炎が辺りを照らす。露出した岩肌はやけに寒々しく、淀んだ空氣の臭いが鼻を突いた。

奥から運搬夫がトロッコを押してきて、エヴァンの横を通り過ぎていく。やがて見慣れた光景も少しずつ変わってきて、排水作業に従事している鉱夫の姿も見られるようになつてくる。まだそこまで深く掘り進められているわけではないらしい。

ようやく掘削作業に従事している男たちのところに辿り着くと、エヴァンはいよいよ仕事だと緊張を隠しきれなくなつた。

鉱山では崩落やガスの危険性など、いつ死が降りかかるかわからない。この苛酷な環境は、魔物なんかより余程恐ろしいものである。

依頼内容は、出没する魔物を駆除するというものだ。それゆえにこういった掘削には関わらなくてもいいのだが、いつになく体が強張る。

「どうした坊主、びびつてんのか？」

「……何分、坑道は初めてなものでして」

「だろうな。が、俺たちにとつちや、こんなのは家みてえなもんよ！」

豪快に笑うドワーフの男に、周囲の冒険者たちは奢めるような視線を向ける。今つるはしを振るつている男たちはいい気がしないだろうから、当然の反応だったとも言えよう。

それから各々、周囲の警戒に当たる。偶然、魔物の巣を掘り当ててしまうこともあるそうで、油断はできない。

が、それよりも早く、別の危機が襲ってきた。岩肌からゆらりと姿を現したのは、長い胴体を持ち、舌を出し入れするマムシ。街は遠く、毒が回つてしまえば処置が遅れることになる。エヴァンは飛び退くと、背にした龍の牙を抜く。そして間髪入れずに一撃を叩き込んだ。

一瞬、弾力があつたものの、すぐにそれはなくなる。胴体を押し潰され真つ二つになつたマムシが地に落ちる。たかが爬虫類を相手に過剰な反応だったかもしれない。

そんなエヴァンの姿は、マムシ程度なら手掴みにしてしまう鉱夫たちからは、もやしつ子に見えことだろう。が、魔物の脅威となれば、また別である。

エヴァンは牙についた血を拭い去り、気を引き締めていく。

それから暫くは何事もなく時間が過ぎていった。これほど楽な仕事があつていいものだろうかと思いつ始めるほどである。

しかし、そうした油断が胸中を掠めたとき、坑道を揺るがす衝撃が起きた。鉱夫たちは一斉にその場を立ち退き、魔物の危機を叫ぶ。

エヴァンはセラフィナと現場に向かつて駆け出す。そして次の瞬間、岩壁が開かれ、肌色に近い鼻先が突き出した。その根元には毛に覆われた小さな瞳。

ガラガラと音を立てて岩が崩れ、土を搔き分けるのに適した大きな手が現れた。頭部の左右に現れたそれには鋭い爪が生えており、強い力で掘り進んでくる。

数名の冒険者たちが集まつてくる中、エヴァンは龍の牙を正眼に構えた。周囲には十分な空間があり、振り回すのに何の障害もない。

人の背丈ほどもある茶褐色の頭がようやく出て、それからずんぐりとした胴体が一気に飛び込んでくる。その動きは丸々とした団体からは到底考えられないほどに素早い。

鉱山モグラ、と呼ばれる魔物だつた。

先手必勝とばかりに、冒険者たちが飛び込んだ。剣を掲げ、思い切り振り抜く。が、敵の方が一枚上手であった。

頭部を素早く動かし、大きな手をばたつかせて襲い来る者たちを振り払う。爪は鉄を切り裂くほどに鋭く、その力は巨岩を払うほどに強い。

一撃を食らつた冒険者は怯み後退するも、すぐさま体勢を立て直して剣を掲げる。が、そのときには既にモグラの方も移動を終えている。

どこかに頭を突つ込んでいないと気が済まないのか、あちこちをほじくり回し、岩石を辺りに撒き散らす。胴体が半ばまで埋まるとうやく安堵して、地面を這いずるように辺りの探索に乗り出す。

しかしそれは身動きを取りづらくしたに過ぎない。背後に回り込んでいた冒険者が、鋭い一撃を放つた。ジタバタともがくモグラの短い毛の内側の、肉の深くまで刃が突き刺さる。

いよいよ、鉱山モグラは自身の作った穴から飛び出し、近くにいた冒険者どもを叩きのめし、周囲を駆け巡つた。

そしてエヴァンのところに真っすぐ向かってくる。彼は牙を構えたまま、微動だにせず敵を見据えた。

短い手足を頻りに動かし、土を巻き上げ小石を弾き飛ばす様は、竜巻をも連想させる。抵抗しようもないと思われるほどの圧倒的な勢いを前にして、しかしエヴァンは踏み込んだ。直進してくる敵には迷いも躊躇いもない。一瞬のミスが命取りになる。だが、エヴァンはその位置こそが適切だと思った。

真正面。

モグラの手足は外側に向かつてついており、非常に短い。土を搔き分けるのに適している反面、眼前にある獲物を両側から捕まえる動きを取ることができない。それゆえに隙ができる。だが、それも体を一ひねりされるまでの一瞬だ。

エヴァンに気負いはなかつた。ゆつくりと、龍の牙を上段に構える。そして背後にセラフィナを控えたまま、強く地を蹴り一気に跳躍した。

彼我の距離が一瞬にして縮まる。エヴァンは強い風を感じていた。

それは正面から吹きつけてくる、敵が生み出す乱氣流。そして自身を駆り立てる後押しの風。

眼前を敵の爪が横に難いしていくのを合図に、エヴァンは手にした牙を振り下ろした。

刃筋も刀線も刃波も、もはや関係ない。武骨な龍の牙がもたらすのは純粹なる衝撃。真っ向から当てればよい、ただそれだけのことだ。

それゆえにエヴァンは真正面から振り下ろした牙を、力の限りに打ちつける。その軌跡は見事なものだ。

弧を描いた。

鉱山モグラの顔に一撃。敵の突進を止めるのには十分であつたのだろう、ぴたりと両者の動きが止まつた。が、力が拮抗していたわけではないことがすぐ明らかになる。

急に互いが動き出す。エヴァンは渾身の一撃を叩き込んだ後でバランスを崩し、鉱山モグラは痛みに頭を引っ込める。

そこに誰よりも早く切り込む影がある。槍が炎に照らされて、鈍く輝いた。銀の穂先は敵の片手の付け根を抉り取り、互いに次の手を出しかねていた拮抗状態を破る。

エヴァンは好機と見て、鼻先に一撃を加えると、その反動を利用して素早く後退する。鉱山モグラの無事な方の手が未練がましく追つてくるが、可動範囲の外であり、届きはしない。

一度動きを止めた敵には、冒険者たちが群がるようにして、四方から飛びかかっていた。鉱山モグラは胴体を切られ、後ろ足を刎ねられ、そして心の臓に刃が突き刺された。

悲鳴が上がる間もなかつた。硬直したように仰け反ると、もはや最後の足掻きさえできずに、地に横たわる。

冒険者の一人が勝鬨を上げた。それにつられて、他の者たちも声を上げる。

珍しい、とエヴァンは彼らを見遣る。冒険者たちにとつて、勝利を共有しようなどという考えはほとんどない。エヴァンもすっかりその考えに慣れており、頭の中にあるのは、この鉱山モグラが魔力に戻つた際に生じる魔石をいかに多く手にするか、あるいは何か残つた素材——たとえば宝石などを誰よりも先に得るか、といったことである。

このモグラは一体だけなので、戦利品があちこちに分散することはない。そのため、魔石が生じるときを今か今かと、エヴァンは周囲の警戒もそこそこに待っていたのだ。

やがてモグラは腹の中に蓄えていたのか、いくつかの鉱石とそれなりに大きい魔石を落とす。

エヴァンとセラフィナは先陣を切つて、それらに飛びかかった。外聞などはもはや気にしてはいる。そもそも、金のために働いているのだから。

一方、冒険者たちは行動を起こさなかつた。エヴァンはその隙に手当たり次第に戦利品をかき集めていく。それからようやく他の者たちもエヴァンの方を見て、慌てたように火事場泥棒かじばうどろぼうに参加するのだった。

ここでの冒険者にそういった習慣はないのだろうかと思つたが、基本的に無主物先占の原理はどこ

の国でも同じだ。

冒険者たちは先走つたエヴァンに文句を言うこともなく、小言を呟きながら守備に戻つていった。やがて連絡が行き届くと鉱員たちが戻つてきて、何事もなかつたかのように掘削を再開する。

どうやら、鉱山モグラの作った穴を利用するようだ。その巣穴を辿つていけば、いくつか宝石などもあるかもしれないが、魔物が落としたものと元々存在していたものの区別がつかないため、冒険者が権利を主張することはできない。

エヴァンは鉱員たちの護衛も兼ねて、穴の奥を覗きに行く。支保工のない穴はいつ崩落してもおかしくない状態で、この穴から別の魔物がひょいと顔を覗かせても何の不思議もない。

深く無秩序に掘られ、入り組んだ道を進む。鉱員たちはときおり、坑内図に何かを書き込みながら

穴を調べている。

結局、その日は他に何事もなく、エヴァンの仕事は終わつた。坑道から出てきたときには既に日も暮れつつあり、これから男たちは街に戻つて一杯引っかけるに違いない。

地下から出るなり、エヴァンは大きく深呼吸する。空気がおいしいと感じるのは、こういう体験でもしなければ経験できないことだ。

夕暮れ時、街へと歩いていく男たちの姿は、くたびれているようにも活力に溢れているようにも見える。

「セラ、帰ろうか」

「はい。夕飯は何にしましよう？」

「今日は遅いし、どこかで食べていいこうか。臨時収入もあることだし」

「ではそうしましよう」

エヴァンは薄汚れていたが、手をズボンで拭いてから、そつとセラフィナの手を取つた。彼女もまた頬に煤がついている。エヴァンが拭うと、セラフィナは小さくほにかんだ。
それから汚れた互いを見て、笑い合つた。

その晩、エヴァンは宿の酒場で夕食を取ることにした。既に夜も遅いので大抵の店は閉まつてゐる一方、ドワーフたちは豪が多く、酒場はどこも賑わつてゐる。とはいって、エヴァンは酒を飲む気などなく、セラフィナは未成年。店からすれば、き異な客だろう。

今日泊まる宿で食事を取つてもよかつたのだが、そこは大多数の宿がそうであるように、メニューや酒とちょっとした肴程度しかなかつた。たっぷり働いた後の晚餐には物足りないので、食事だけは別のところで取ることにしたのである。

次の日はこの宿に泊まつてもいいかもしれないなどと思つたが、安宿なので個室はなく、相部屋で雑魚寝しなければならないのだ。

ハンフリー王国で一度だけ依頼の最中に雑魚寝をしたことはあつたが、あれは敵襲に備えたものであつて、それぞれ武装したままであり、仮眠に近いものだつた。

しかしここではそうではない。庶民の大半は貞操觀念に乏しく素っ裸で寝るだろうし、隣に病気持ちがいた場合は最悪だ。それに人が増えてくると床で寝る者も増えてくるし、物を盗まれたり寝首をかかれたりもする。

何より、そんな状況下にセラフィナを放り込むことなど考えられなかつた。万が一襲われたところで容易く返り討ちにできるだろうが、そうはいつてもまだ十四歳なのだ。精神的な傷は残したくなき。それゆえに、宿は少々値が張るもの、個室で風呂つきのものを選ぶようにしていく。

エヴァンはテーブルを挟んでセラフィナと向かい合い、料理が運ばれてくるのを待つ。高い宿ではなく飯も安いので、味はほとんど期待できないだろう。しかし腹はぐうと鳴り、周囲の料理の香りが流れてくるだけで、涎よだれが出そうになる。

「それにしても、坑道というところは、すごい場所でしたね」

「そうだね。あんなところに一年中通い詰めるのは俺には考えられないや」

「私もです。空が見える場所がいいですね」

「死ぬにしても、埋まって死ぬよりは、死んでから埋められたいよ」

そんなシャレにもならないことを言つていると、前菜の野菜の盛り合わせと、煮豆のスープが運ばれてきた。

「いただきます」と、声を揃えてから、それぞれ料理に手をつける。野菜には粉チーズがまぶしてあり、簡素な味付けではあるものの、口中に広がる香りが食欲をそそる。

それから煮豆のスープを啜すする。大して具も入つておらず薄味なのだが、すつと熱さが喉元を過ぎると、腹の底に心地こころちよ好い温もりが広がっていく。

ふう、と一息つくと、ようやく今日の依頼をこなしたのだという実感が湧いてきた。
「鉱石、いくらくらいになるだろう？」

「どうでしょう。私には見当がつきません」
「高く売れるといいね」

鉱石の中に綺麗なものがあればセラフィナにプレゼントしようと思つていたが、さほど価値のあらうなものはなく、中にはただの石ころではないかと疑われるようなものも多い。

そうしてのんびり過ごしていると、周りの噂話も耳に入つてくる。エヴァンは酒場には滅多に来ないが、最近の話題を追うにはいい場所なのかもしれない。

「なあ、お前聞いたか？ エルフの王子様が来るんだってよ」「はー、なんだつてこんなところに来るんだ。あのいかにも綺麗な空氣以外耐えられねえって顔した

やつらじや、こここの煙を吸つたら卒倒しちまうんではねえの」

「滅多なこと言うもんじやねえぞ。聞かれたら打ち首にされかねない。俺らの王様と違つて、冗談も通じねえからな」

「全くだ……にしても、リボル様も大変だ。最近じやあエルフどもも調子づいてきてやがる」「さほど関与しようと思わないエヴァンには、あまり居心地がいい環境ではない。それを聞いて咎めようとする者などここにはいない。多数はむしろ同調するように、日頃の鬱憤を相伴している者にぶつける始末だ。

どちらにもさほど咎めようとする者などここにはいない。多数はむしろ同調するように、日頃の鬱憤が、メインであるパンと肉——酒飲みたちにとつては酒肴だが——が運ばれてくるとそんなことも忘れ、エヴァンはその香りについ頬を緩める。

そして手掴みでパンを頬張り、肉に齧りつく。どちらも上等とは言い難いものだが、空腹に勝る調味料はない。

「エヴァン様、ついてますよ」

セラフィナはエヴァンの口元を指ですつと拭う。彼女の嫋やかな指が油に濡れて妖しく光る。

「ありがとうセラ」

「いえ。エヴァン様はそそつかしいところがありますから」

彼女はそう言って笑う。エヴァンもその傾向があることは自覚している。一度何かをやろうと思えばどことん、どこまでも手や頭を動かすのが彼だ。

とはいえる、食事の最中。さして気にすることもなく、その味を堪能する。セラフィナも満足げな

ので、何も言うことなどない。

そうして食事を終えたとき、既に夜は更けていた。酒場は相変わらず活気で溢れていたが、酔い潰れる者も多く、二階へ運ばれていく者もいる。そんな姿を見てエヴァンは、やはりこんなところに泊まるのはよそう、と思うのだった。

酒場を出ると、夜だというのにあまり澄んだ空氣は感じられない。塵埃が混じっているのだろう。星明かりはあまり見られず、月には雲がかかっている。

それについても、二度も国境を越えたのだと思うと、随分と遠くに来てしまったと感じられる。これからは、さらに遠くに行くのだろう。

「あのさ、セラ」

「はい、なんでしょう?」

「旅が終わったら、どこかいい土地に家を買って、のんびり過ごしたいものだと思ったんだけど」「いずれはそうなるといいですね……ですが、まずはお金を貯めねばなりません」

「今は全然、足りないね」

「はい。全然、です」

セラフィナは割と現実的なことを言いつつも、批判を口にしなかつた。この世界で生きていくにしても、エヴァンは知らないことが多い。だが、知識も経験も大人になれば自然と増えていくものでもない。一生を同じ土地、同じ門の中、同じ家の中で過ごす者たちにとって、変化とは自身の老化以外の何でもないだろう。

変わらねば、と思う反面、変わらないままであつてほしいと願うこともある。エヴァンは相反する思いに蓋をする。もう宿に着いてしまったのだ。後は微睡み、夢の世界をたゆたうだけ。宿の台所で歯を磨き、寝る準備を済ませて床に入る。大して寝心地のよくないベッドも、隣にセラファイナがいてくれるだけで、不思議と居心地のいい空間に早変わりする。眼たげな彼女は小さく欠伸をした。

「エヴァン様、おやすみなさい」

「ああ、おやすみ、また明日」

彼女の姿をいつまでも見ていたいような気もしたが、明日がある。今日やり残したこと、溜め込んだ思いを全て明日に丸投げして、瞼を閉じる。

彼女の寝顔がいつまでも、瞼の裏に焼きついていた。

4

エヴァンの前に置かれている剣は、新品同様に真っ直ぐ伸びており、刃はどこから眺めようと均一な輝きを誇っていた。家紋はその中で一層際立っている。

「これはお見事ですね」

「何かあればいつでも来てください」

剣を手に取り眺めるエヴァンに、男はそれだけ告げると席を立つた。礼儀として渡しに来たようだが、仕事はおそらく山積みなのだ。呑氣に世間話をしている暇はないだろう。

一方、エヴァンは剣を腰に佩くと店を出て、早速鉱山へと駆けていく。営業時間の都合上、取りに来るのがぎりぎりになつたのだ。のんびりしてては、始業に間に合わなくなる。

「綺麗になつて、よかつたですね」

「そうだね。でもこの剣も、いつまで持つんだろうか」

「大丈夫ですよ、きっと孫の代まで持つてくれます」

「そうだといいけれど」

にこにこしているセラファイナに向けっていた視線を、自分の腰元に落とす。そこにあるのはダグラス家の家紋。どこに行こうと何に変わろうと、ダグラスの名はいつまでもついてくる。権利を得るということは、縛られるということもある。エヴァンは領地を離れてから、これといった出来事はなかつたのにもかかわらず、自身が貴族だと意識させられることが多くなった。しかし、それもすぐに意識の彼方に消えていく。

「今日も、何事もなく一日が過ぎていくといいね」

「はい。ですがエヴァン様には、もう少し好奇心や冒険心があつてもよい気がします」「そんな瞳を輝かせた少年みたいのは、俺じゃないよ」

「全く、その通りです」

そうしたやり取りをしているうちに、鉱山に到着した。

挨拶やら入坑前の準備やらを済ませたとき、まだ始業時間には少々早かつた。しかし何もせずにいるのもどうかと思われて、エヴァンは肺一杯に新鮮な空気を吸い込むと坑道へと歩き出した。

「そこに声がかかった。振り返ると、鉱山の管理者が心底面倒そうに告げる。

「今日はお偉いさんが来るそุดだから、粗相のないよう。なに、来たらとりあえず頭を下げておけばいい。なんか言われたら、『ははーツ』と畏まつておけばいい。くれぐれも、厄介ごとだけは起こすなよ」

「はい、承知いたしました」

エヴァンとセラフィナは頭を下げてから、くるりと向きを変えて、暗い穴の中へと進んでいく。お偉いさん、と言った割に彼の態度はぞんざいだった。何かあるのだろうかと勘織るも、そもそも来たばかりのエヴァンはこの国内情については知らない。

それでも何となく想像がついたのは、逆に彼の情報が限られていたからか。

（ああ、エルフがどうこう言つてたつけ。ならば、あくまで余所のお偉いさんなのだろう）

ドワーフの敬意の対象ではないだけだ。そう考えると、至極くだらないことのように思われて、エヴァンはげんなりとする。

とはいっても、すべきことは単純明快、坑内に出現した魔物を狩るだけ。それだけでいいのだから、汗みずくになって働いている鉱夫たちには申し訳ないように思われる。しかし、ともすれば食い殺されるのだから、彼らから不満が出ることはない。

丸一日何もないこともあれば、十体近く出現することもあり、動向には全く見当がつかない。そ

れゆえに、エヴァンも氣負いすぎないよう考えていた。

今日も敵を狩るだけである。剣に手を添えると、家紋が炎に照らされ、煌めいた。

トマーシュ・ホラーケは馬車に揺られながら、にこやかな表情を貼りつけていた。その仮面の下では、緊張と不安がないまぜになつていて。

馬車の窓から見える光景は、彼が生まれ育った土地とは趣が異なる。おもしろさぎ辺りには野山が残されているので、風土の違いを感じずにはいられない。

実際にはそれほど距離ではなく、大きく気候が変わることもないため、彼の先入観が大きな要素を占めていたに違いない。しかし、そうでないところもある。

まず、自然が残されているといつても、その関係性が大きく異なる。エルフたちは自然にできるだけ手を加えずありのままを残しながら恵みを享受する^{きよしゆじゆ}考え方のに対し、ドワーフたちはできるだけ人の手を加えて、生産性を高めることをよしとした。

それゆえに、トマーシュの目に映つている自然が不自然に見えるのも仕方がない。

「お兄様、そろそろ到着します。そのようなお顔をされていては、エルフの王は何と恐ろしいお方か」と噂されてしまますよ」

「ええ。まるで戦争に赴くかのように」

彼の妹、カリナは上品に笑う。

トマーシュを知らぬ者が見れば、彼は笑顔だと誰もが思うだろう。しかし、かねてから彼の後ろをくつっていたカリナからすれば、仮面の下の表情など透けて見えるも当然だつた。

トマーシュは妹に心配をかけさせるようでは、と表情を改める。カリナが頼れる兄を求めていたのに対し、トマーシュも頼れる兄であろうと努めてきた。それが王族たらんとする今の彼を作り上げてきたとしても過言ではないだろう。

馬車はやがて鉱山に辿り着いた。これまでいくつかの街で顔見せを行つてきたが、最終的な目的地は、華やかさとはかけ離れていた。

とても貴族たちが行く場所とは思えない鉱山がなぜ目的地になつたのかといふと、ドワーフたちの領地にはこれといった観光地がないからだ。互いの文化の受け入れを名目としているため、鍛冶といえど鉱石、そしてドワーフ側の嫌がらせもあつてこうなつた。

トマーシュもカリナも、そんなことは知らない。薄々勘づいてはいるものの、議会に参加しない彼らには、権謀術数渦巻く政治の場は少々難しいものであつた。

近衛兵が「殿下、到着いたしました」と馬車を止める。トマーシュは馬車を降り、カリナに手を貸す。姿に優れた二人の様子は絵になるものだつたが、周囲は土と岩ばかりの鉱山だから却つて異質に見えるだけであつた。

それから周囲に十名ほどの兵を伴つて、坑内に足を踏み入れる。

「殿下、お気をつけください」

「ああ、わかっている。そう気にするな、よもや化け物が出ることもあるまい」

湿度や暗さ、そして足音の反響など、子供ならば泣き叫びそうな環境でも、彼が表情を変えなかつたのはさすがといつてもいい。常に人々の指針となるのが王族としての資質なのだから。

そうして奥へと進んでいく中、ドワーフたちの奇異の視線が突き刺さる。このような仄暗い坑内であつたためか、彼らの瞳には妙な仄暗さがあつた。掘削の音が響く中、エルフとドワーフの物言わぬ視線が交錯する。それでもトマーシュが浮かべるのは変わらない笑顔の仮面だつた。

坑内がにわかに騒がしくなつた。

(あのエルフ様が、なんかやらかしがつたのか?)

鉱山の管理者は、思わぬ人物の来訪に戸惑いを覚えていた。彼の前に立つのは歴戦の将、ヘルベルト・ボチエク。武人としての強さや猛々しさだけでなく、徹底した民への思いやりも持つており、チエペク共和国内では名が通つていた。

そんな豪傑と呼ぶに相応しい者が、なぜここへ。その疑問に対する答えは、彼自身が既に持つているものだつた。

すぐにはそう思うのは、彼が初めからその来訪者に対していい感情を抱いていなかつたからだ。そもそも、国からの依頼であるため仕方なしに受けたのであり、余所者を自分の城とも言える坑内に入れたくはなかつた。

が、そんな思いなどは微塵も見せず、掌が焼き切れそうなほどに揉み手をして用件を伺う。

「こちらへは、どのようなご用件でいらっしゃいましたか?」

「うむ。実はここに賊が紛れ込んだ、という情報を仕入れてな」

「はて、当方ではそのようなことは」

「で、あろう。直々に下された命である。いまだ他の誰にも知られてはおらぬ」

管理人は一瞬、この中に入つていった者たちの姿を思い返そうとしたが、自身より頭二つ分は大きな男の威圧感と力強い物言いに、考えるまでもなく納得してしまった。

準備を終えたらしい彼の部下が足並みを揃えてその後ろに整列する。その数は百人近い。千人近い隊を率いたこともあるヘルベルトにしては少ない方だ。

しかし、練度の高さは雑兵とは比べ物にならない。どうやら精銳のみを引き連れてきたらしい。「では、これより内部を調査させていただく。鉱員たちには一旦外出してもらうがよろしいか」

有無を言わざない気迫があり、当然、頭を下げていた男は二つ返事で受け入れた。

こうして、ヘルベルト・ボチエクは坑内へと足を踏み入れることになった。

それからは一瞬のことだった。兵たちを自分の手足のように自在に動かし、坑道から次々とドワーフたちを吐き出させていく。暗い坑内に金属音が響き渡る。

そして数刻と経たぬうちに、坑道は空っぽになつた。

トマーシュ・ホラーケが冒険者たちと顔を合わせているときのことだつた。魔物が出没する可能性があるため、彼らが案内を申し出していたのである。その好意を無下にする理由もなかつたので、トマーシュは了承して従つていた。

そして今、彼らは坑道の突き当たりにいた。鉱山モグラが作つた穴ではなく、計画通りに進められた最奥だつた。それゆえに岩盤はしつかりしており、崩落の危険性は今のところない。だというのに、トマーシュは空間が揺れているように感じていた。「何かあるのか」と問おうとした彼の瞳に、銀色が映る。

トマーシュたちへと突き進んでくる十数の全身鎧は、彼も何度か目にしたことのあるドワーフの兵団のものだつた。深くかぶつた兜で彼らの表情は見えず、抜身の刃だけがやけに強烈だつた。護衛しに来たわけではないのは明白だつた。近衛兵たちはすぐに異変に気がつき、その集団に対して剣を構え、突撃に備えて前面を厚くする。

「殿下、お下がりください！」

ならず者たちの変容に慌てることなく対処できるのは、実力で選ばれた証左であり、そして主君への高い忠誠の表れでもあつた。

が、攻撃は予想外のところから起つた。これまで案内していくみすばらしい冒険者たちが、近衛兵たちに加勢する動きを見せた後、急に彼らへと切りかかつたのである。

「貴様！」

近衛兵の一人が叫んだ。隣の同胞の首が落ちるのには一瞥もくれなかつた。決して彼が非情だつたからではなく、その意志を継ぐ覚悟があつたからだ。それよりもトマーシュを守らねばならない。侵食領域を広げた近衛兵の一人は、無数の石の刃を生成し、冒険者たちへと撃ち出した。胸部と急所のみを重点的に補強しただけの古びた鎧は次々と撃ちぬかれ、剥き出しになつていて腕は肉が

こそげ落とされて骨が覗いた。

が、数人の犠牲者の向こうから飛び出した冒險者が、その近衛兵に襲いかかる。そして容赦のない一撃が首を刎ねた。

ごろり、と男の首が、地に落ちた。顔は怒りに染まつており、死してなお、噛みついてきそないほど歯を食いしばっている。

そして近衛兵とドワーフの兵团が衝突する。近衛兵たちは並の兵士相手ならば圧倒できる実力の持ち主で構成されていたが、それでも数の差には抗うことはできなかつた。

一人、二人と近衛兵たちは倒れていくが、誰一人降伏することはなく、やがて武器を持たない一人だけが取り残された。

周りには、いくつもの首が転がり、物言わぬ遺体が打ち捨てられている。エルフのものも、ドワーフのものも、等しく赤に染まつていた。トマーシュはカリナを抱きしめたまま、襲撃者の隊長格らしい男を睨みつける。

カリナは青ざめ全身を戦慄させており、恐怖に打ちひしがれ、今にも泣き出しそうであつた。だからトマーシュまで喚き散らすわけにはいかなかつた。

「このような行い、決して許されるものではないぞ」

「ええ、十分承知しております。このまま従つていただければ、殿下には危害を加えません。ついてきていただけですか」

口調こそ丁寧だったが、それは暗にお前が従わなければ妹の方に危害を加えるぞ、という脅しで

あつた。そしてトマーシュはカリナを前にして、さらなる抵抗などできなかつた。そうしたところで、何も変わらないことくらいは知つている。

金属が擦れ合う音といくつかの足音が響く中、誰一人言葉を発しなかつた。そしてトマーシュ・ホラークとカリナ・ホラークは人質となり、ヘルベルト・ボチエクの手に落ちた。

このことはすぐさま議会に届けられることとなり、やがて国中で噂されることになる。後の世まで伝えられることになるヘルベルトの乱、その勃発であつた。

エヴァンはセラフィナと二人だけで坑道の最奥にいた。鉱山モグラの掘つた穴の中を単独で探つていたのである。その理由は鉱員たちから、「多少はちょろまかしてもいいから安全を確認してこい」という指示が出たということだ。

要するに鉱員たちは、自分たちが同行するのは危険で嫌だが、人が集まるのを待つていて進行が遅れ、後でどやされるのも避けたかった。

エヴァンとしても不都合は感じなかつたので、さつさと探索を進めてしまつた方が楽である。暫く坑内にいたこともあって、危険そなところは何となくわかるようになつていた。

今、彼の目の前には、中型の鉱山モグラの死骸があつた。周囲に誰もいなため、遠慮なく魔法をぶち込んだ結果、あつさりとくたばつたのだ。

が、残つたのは魔石だけで、エヴァンは嘆息する。そして魔石を懐に突つ込むと、探索を終えて来た道を引き返す。

「しかし、こうも何もないよ、働き損な気がしてしまうよ」

「エヴァン様、本来の依頼では、貰えないものですから、そのようなこともないでしょ？」

「それはわかつてゐるけどさ。それより他の冒險者たちは何をしてゐるのやら？」

エヴァンは彼らの姿を思い返す。腕は確かだつたが、どことなく冒險者らしからぬ仕草が目立つており、ときおり姿をくらますこともあつた。エヴァンは集団行動を好む方ではないが、それで迷惑をかけられてはたまつたものではない。

ようやく鉱山モグラの作った穴から抜け出たとき、坑道の向こうから叫び声が聞こえてきた。そして金属が交わる音も。

どうしたものかと思うも、依頼に関係することであれば、何をやつていたのだと叱しかられかねない。エヴァンはさほど急ぐでもなく、そちらに向かつて歩き始めた。

だが次の瞬間、向こうから全身鎧に身を包んだドワーフたちが現れた。彼らはエヴァンの姿を見て戸惑つたようだつたが、すぐに無表情に戻つて告げる。

「投降してもらおうか。手荒な真似はしない」

エヴァンは相対している男たちの姿をざつと確認すると、素直に両手を上げた。

敵の数は十を超える。それも熟達した兵であるようで、戦つては無傷で切り抜けられまい。それだけならまだいいが、おそらく他にも兵は大勢いるだろう。エヴァンたちを捕縛するためになに来たわけではなき、そういうのだから。

「剣を渡して貰おう。その棒もな」

先頭にいた男が告げると、エヴァンは剣帯から鞘さやごと剣を外すと、龍の牙と共に相手の方へと放り投げた。セラフィナも彼に倣ならつて、槍を相手方に渡す。

それで何事もなく終わるかと思われたが、男は剣に視線を落とすと上官らしい男に何事かを呟いた。上官の男は眉を顰ひそめたが、やがて思い出したように顔を上げる。

エヴァンは何やら嫌な予感がしていだ。あの剣にはダグラス家の家紋が入つている。果たして、それは現実となつた。

「悪いが事情が変わつた。なに、命を取るわけではない。これより同行していただく」

小隊長の男が告げると、エヴァンの頭には目の前にいる男たちを切り裂いて状況を突破する未来が浮かんだ。今は剣などなくとも、生成魔法で代わりの何かを生み出すことは容易い。だから過剰な自信を抱いてしまつたのだと、エヴァンは慌ててその考えを追い払つた。

が、彼が大人しく従つてゐるのは、ひとえにセラフィナに危害が加えられていないからである。彼女に傷一つでもつけられれば、エヴァンは今にも飛びかかり、敵の眼球を抉り出し、その喉を搔くことだらう。

エヴァンは一見、無表情であるが、兵たちがセラフィナに近づくと刃の如く鋭い視線を投げかけるものだから、彼らも二人から距離を取るようになった。

それから誰一人口を聞かず、坑道内をひたすらに進んでいく。先ほど聞こえた喧騒けんそうもどこへ行つたのやら、これといった物音は聞こえない。

やがて本来の坑道——計画通りに進めてきた道だが、鉱山モグラの掘つたものを利用したために

使われなくなつた最奥——に行きつく。暫く進んでいた突き当たりには、仮設の処理設備が設置されており、排泄^{はいせつ}、ごみの廃棄^{はいけい}、といったものはそこで行えるようになつていた。

とはいへ、坑内ではそこまで脱糞^{だつふん}する者も多く、適当な穴を掘つて埋めてしまえばそうそうわかるものではない。そうした行為が黙認される中、わざわざそこで排泄しようとする者は多くないのだろう。使われている形跡はなく、消臭用の石灰^{せつかい}は手つかずのままだつた。

そうした場所に連れてこられたからには、すぐに出してもらえることはあるまい。しかし急に命を取られることもなかろう。

どうしたものかと思いつつも、エヴァンはこれまで歩いてきた坑道の地図を思い描いていた。鉱山モグラの穴を利用しているため、一本道ではなく所々分岐点がある。それゆえに、敵も全てを守ることはできないはず。多少の人数ならば、突破して地上への道を辿ることも可能だろう。

が、今はまだそのときではない。敵の力がわからない以上、迂闊^{うかつ}に出ていつて一太刀で切り殺されてしまつては元も子もない。

そしてそこには、エルフの青年と少女がいた。少女を抱きかかえている青年は恋人だろうか。エヴァンは二人の仕草^{しざ}を一つも見逃さぬようにして、状況把握に努める。

たまたま坑道内に居合わせたという線はないだろう。エルフはこちらでは滅多に見ないし、何より坑内が似合う姿ではない。

衣服は血や土で汚れているものの、鮮やかな色合いの布地で作られており、そこらの平民たちとは一風異なる。とはいへ、エヴァンが見たエルフというのは、ワツカ共和国内にいる者たちであり、

彼らの故郷での様子など知る由もなかつたのだが。

兵は暫し留まるよう告げると、数名の見張りを残して離れていつた。

エヴァンは兵から離れ、エルフたちの近くにどつかと腰を下ろす。隣に座つたセラフィナは、エヴァンがじつと自分の顔を覗き込んでいるのに気がついた。

「セラ、大丈夫?」

「はい。ですが、エヴァン様の剣が失われてしまわないか、心配ですね」

「滅多なことには使われないとと思うよ、一応は他国の貴族だからね。しかしこれが原因で、戦火が広がらなければいいけど」

巻き込まれたとはいへ、自身の取つた行動の結果に関して、エヴァンは他人事のように言う。それはエヴァンが、自分とセラフィナが生き残ること以外、さして興味がなかつたからだろう。

「貴方は、どのような経緯でここへ? いえ、詮索^{せんさく}するつもりはないのですが」

エルフの青年が告げると、エヴァンはあたかも初めて彼に気がついた、という素振りを見せながら答える。

「貴族の身ではあるものの四男坊として、相続とは無縁。そこで冒険者として旅をしていたところ、たまたま坑内で働くことになつたのです」

エヴァンはたまたま、という部分を強調した。エルフの男が興味を持つたのは、おそらく貴族という単語だ。貴族である以上、国の何らかの利権に関わっていると思われた可能性が高い。
そこでは警戒心を解くべく、偶然この場に居合わせたのだと強調したのである。その目論見^{もくろみ}

は上手くいったようで、男はトマーシュ・ホラーケと名乗った。エルフの王族の子孫らしい。

(ならば、どうせ種族間のいがみ合いだろう。俺はいずれ解放される可能性がある)

と、エヴァンは判断する。もちろん、口封じに殺されて埋められる可能性もゼロではないが、ドワーフたちが愛国の士ならば、他国との軋轢あつれきを生む行為を率先して行うことはあるまい。

それからエヴァンはトマーシュと少し話をした。

「この国はドワーフとエルフ、二つの種族により成り立っていますが、国が合併したのは十年ほど前のこと。いまだ諍いの火種はくすぶつております」

彼はその身分からか、直接的な言及を避け、他愛もない話を織り交ぜながら、状況を話す。日頃セラフィナとしか会話していないエヴァンはもどかしくて仕方がなかつたが、表面上は上手くやつてみせる。

(いがみ合つてゐる、小競り合いが続いてゐる、と言えばいいだろう。俺が知りたいのは、敵の規模、目的、指揮官、援軍の可能性、政治への関連といったものであり、世間話なんかではない)

しかしそうした中にも光る情報があるかもしれない、エヴァンは耳を傾ける。もちろん、監視の目がある以上、迂闊なことは口にできないのだが。

やがてカリナがトイレに席を立つたとき、トマーシュがここに来た経緯を語つた。エルフとドワーフの友好のためだつたそつたが、ヘルベルト・ボチェックなる将に襲われて虜囚りよしゅうの身になつたのだ。

(ヘルベルト・ボチェック……知らんな)

少なくとも、他国にも名を知られている人物でないのは確かだつた。

数多の兵を味方にできる影響力を始めとして、何より高い戦闘能力がある人物が首謀者ならば逃亡など不可能になつてくる。見つかつたらすぐさま殺されるような賭けに出るほど、エヴァンは豪胆な性格をしてはいない。

しかし一介の将が起こしたものならば多少は救いがある。と、エヴァンが思考を加速させたところでカリナが戻ってきて、話は振り出しに戻つた。いまだ怯えているらしく、彼女を落ち着かせるのにトマーシュは必死であつた。

同性のセラフィナがいることが、多少は不安を和らげたのかもしれない。彼女は女性でありながら、エヴァンより余程豪傑である。宮廷住まいの姫君には、さぞ心強いに違いない。

姫という立場の者であれば、その侍女たちに戦いくさ心得のある者がいてもおかしくない。だが、女性の騎士はどの国でもそう見られるものではない。膂力りょりよくや気性の問題などがあるからだ。

しかしセラフィナはそれらの問題を全て解決していると言つてもいい。偶然か、あるいは天性のものなのか、その柔肌からは想像できないほどの膂力と、一度敵を前にすれば必ずや討ち取らんとする豪胆さを持ち合わせている。しかし男勝りというわけでもなく、少女らしい淡い思いを抱いたり、英雄の恋物語に心を躍らせたりもする。

エヴァンはこの少女がいてくれることに感謝しつつも、ときおり、なぜこのような幸運が自分のところに舞い降りてきたのかと疑心暗鬼にならざるを得ないほどだつた。

とにかく、そんなわけでセラフィナは姫君にとつて珍しい人物だつたに違いない、カリナは彼女

の話に引き込まれていた。

「……というわけで、エヴァン様はおつしやられたのです。あらゆる手段を使ってでも領主に成り上がり、お前らを断罪する、と」

「まあ、何という御覚悟なのでしょう」

いつの間にやら、話はセラフィナ自身のことからエヴァンのことに移っていたらしい。しかしエヴァンとしてはそう言わると面はゆい。

「私などよりカリナ様のお父上の方が、よほど素晴らしい御覚悟をお持ちでしよう」

話を逸らすべく、咄嗟に出た言葉だったのだが、カリナは花咲くような笑みを見せる。

「私カリナの誇れるものがあるとすれば、それはお兄様とお父様を家族に持つたことでしょう。いつもこの上なく温かな愛情を注いでくださいました」

と、彼女は恍惚にも近い表情で、その有様を思ひ浮かべた。それが事実なのか、あるいは彼女がこの状況下で作り上げた夢想なのかはわからない。しかし、彼女が父を信頼していることは確かだつた。

が、エヴァンがそこに見出したのは、美しい家族愛でも理想の家族像でもなく、勝利への一步だつた。

援軍が来る。あるいは、そのまま要求を呑み、解放してくれるかもしない。

エヴァンは一つずつ、情報を集めていくことに専念した。

5

チエペク共和国議会は荒れに荒れていた。「今すぐヘルベルト・ボチエクを討つべきだ！」とある者が叫べば、「トマーシュ殿下を見殺しにする気か！」と非難の声が上がる。

そこまで纏まりがないのは、この議会がドワーフとエルフ、二つの種族で構成されているからだけではなく、具体的な解決策が見つかなかつたためだ。

ヘルベルト・ボチエクが要求してきたのは、戦乱によりエルフたちに切り取られたドワーフの領土全ての返還である。それは大昔にエルフの領土だつたものをドワーフたちが奪い、そして生活を移したところも含まれているので、かなりの大きさになる。

どちらもチエペク共和国の領土であるため、国外の者からすればおかしな要求に見える。しかし、そこに疑問を抱く者は国内にほとんど存在していなかつた。ここにいる者たちとて、互いに敵対種族と見なしているも同然なのだから。利権を奪い合つてゐる点を見れば、いまだに戦争を続けていふと言える。

とはいへ、互いに強く出ることは叶わなかつた。

ドワーフたちは同族——それも大軍を指揮する将が乱を起こしたという引け目がある。未然に防ぐことができなかつたことへの追及は免れられないだろう。